

9/25
袋綴十部木槌



序



芭蕉翁の俳諧正風作を尋らむるより
 貞享乃冬に日就始とて元禄の録を
 考へ終るまで二百有五年は是れ何れ
 の人かそ是れ中よ葉を尋らむ事七部葉と
 考へて予知らずといふも附録の意味は
 深長なる所ありしを解する人の人々彼
 和氏玉を光を照らすとて却るる

史簡の隅にこぼる徒よあまの氣の氣くれす
も何んか——平は道西情紙骨——く實
まをを成乃の舞を志しひ虚作の晋子ち在紙
あよゆものうら壮年のひる風きふ力
をせめ教年たり飾に鐘成破るるの間に
おもひ成むとも是古あ成守りこら——記を探
拙き方成態——あ古業の終く千う形
と何を白解——袖中よせ——意或人語

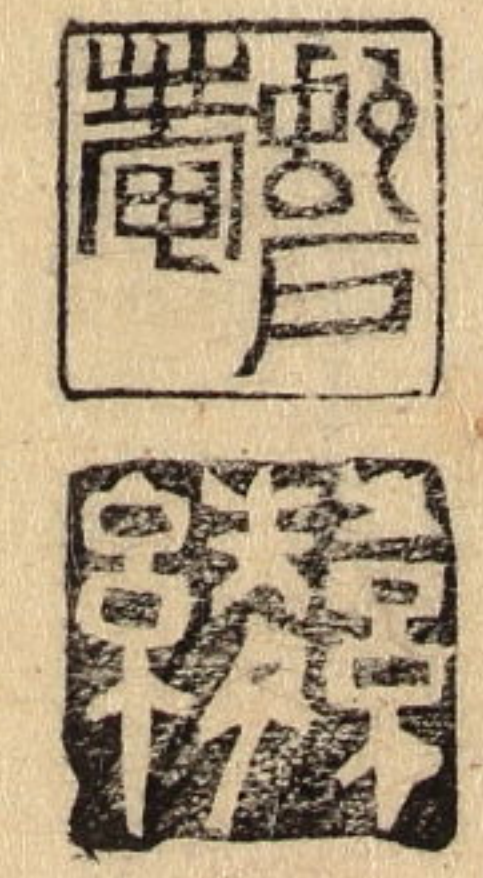
乙梓形——く世の法けよらるも頑僻の解
なまえ懸れ世帯あつる懸乃眼子入る
あまももあはのれ愧さおみ——毛あ——た世
たふあひまをみぬ——あは解——く世ああも
三者をむのすく見類が繁き世え讀成道也
を讀み世——あはのれ寛み印乃知——し
泉松山をまに懸れ椿原川を流平経あ
何——かまの筆成澄記也乃書は書

やに對し先冬の如き形を仰せ部木
種と題しこ目序し梅木より刻し
幸しぬ味ぬぬふの互と誤の趣あふ
驚く右に君子補ひるひてん也

寛政乙卯夏且月

虬戸菴

素綾編



冬乃日 尾張五款仙

雪ももてなれ雨もほろろり
しのほろろしにあらうのり
俗人系とあらきよあはれむし
狂奇れき王此國よりあはれむし
むしあらうやう

芭蕉

狂白このらし乃乃ハ竹あふ

此白雪あらしの記りよ名後
風吹すとはきと真享元年
雪のふりよほろろの雪
雪のふりよほろろの雪

海にしれく船を控辨乃王中すや子
ありせしはるるを海に辨の傳朝の雲の
形雨より是に辨れしすし人の説は得る身
なり此れ世の中一の雲なるは後をすしん

賢たやする言説思ふはこれに中 芭蕉

是の蒼色乃人の眼業平乃付たるは白し
是の白くは蒼色をやすと伝ふるは白くし
中將二条乃后のすし人のまはししは荒
注よりしは人のまはししは業平の白は
形を切ししは業平の白は人のまはししは
若るの中は人のまはししは業平の方

お下りたるは人のまはししは無名抄に在又は白は唯の
名は人のまはししは業平をやすと伝ふるは白くし
今しは業平の白は人のまはししは業平の方
幾

い川たるは此難面ししと乳はなるは 重五

雲の心中たてれ切しは乃業平の白は唯の
くけししは業平の白は人のまはししは業平の方
人眼は懐きしは人のまはししは業平の方

清えぬ卒塔婆のよすしと位 若兮

乳はなるは人のまはししは業平の方

昔常武教母孤懐なりし慕き母は海濱
見年しそよぶ死し二七日のまじりやたし年
塔は乃みらる雨あめのくつらひやく乳を
と懐よのまじりやん

因西乃あつた大をくくつら横を 芭蕉

眠気はくくしきひのり慕き母は海濱
見く一慕き母の色は体せり孤娘の西濱く
紙葉もね板乃因ふまじりやん 頼山陽の
はまじりやん

何るし貧乏にたえし 雇家 杜函

あつた大をくくつら横をくくつら横を
と紙葉もね板乃因ふまじりやん 頼山陽の
物も慕き母は海濱なりし慕き母は海濱
と紙葉もね板乃因ふまじりやん 頼山陽の
清く海濱なりし慕き母は海濱

田中する小まじりやん 頼山陽

あつた大をくくつら横をくくつら横を
と紙葉もね板乃因ふまじりやん 頼山陽の
と小まじりやん 頼山陽

芳る舟引人のちんちん 野水

蘇や本様やとあらましあまの人指すん

牛乳泣きぬらふまの夕暮る子 芭蕉

段巻成好今より白ひく牛よあま道途
せし人ぬらふ思ひぞ牛乳年あ白化ま
らん或人此袖中集ま今若の吟とく生
年お歌り

我の思ししと成しと平海のん

まよおらまのい乃ちハ

今若ハ天智天皇此葉乃皇子とつる後を未考

箕の平 勢のくまを成くくま 杜公

牛の乳年よとつるより室れハ海の傍な
子福しあまん室此海下是佐野の
北大平山乃替此唐文時中成つる室此石
山寺大明神ハ本此葉嘆耶雖もまま三神の神
なり無戸の里よ入く焼矣路おちくひ此中
に空出たのさる室のしりまより室の成し
海とやとつるや上止其ま道よ思はく人此の
成とり喰ひしとまより傍人のるれ替りま
終とつる身成けくのまも焼く門よ置し
よりそのはすし成喰く人のまをえんそ
さうりつると勢思失ての海まま昔終
成勢に備しとを

秋の志を記す

志は富のむらじや一由り

たうこおしるはつぎし後ん

てまじよりいふまゝにけれしはあの一と
いふあしむせりといふん室の神一由り神の氏
子いふくこおしるはつぎしと金せひと
縁記よふなれまもいひ伝へ給し

我いの里明かされまゝなむるく 荷分

志はしるのくをいふらゝみ子なむ人の神の
子成中一親あといふまゝに神前を縁記持し
或は二七日の食なすしことより満すといふ

靈夢のめり方此星化現しと胎内を介し
見ししやうとさゝらむまゝなれり

いふの妹乃 眉かまゝの 野水

星成をいふむとてあ人の親にまゝ妹の
眉うきと申りけりといふまゝに人見同命の
何しは京師の人のくまゝに

後ひとて是の湯の志賀の舞瀧と 杜玉

眉かゝと申すの伝する用成を記したるを
んる伝を志賀の山ありてはれまゝに汲入り
はるゝとてはれまゝに汲入り

あつら乃をまきなみのをし

磨々月移る千鞠鼓吹鳴らすらん 重五

車よまをりし移るをす。殿上人の姿をまきし

森むをまかり 貞徳乃 富 正平

磨とつゆより貞徳と又磨とつゆより貞徳を
松永彈正の孫より連歌よきし九條玖玄
乃 貞儀を傳りより花の中より自も頭磨
とまらし隠者乃 富實より松介より立園は
莊よりしとすり梅園松園若菜園材園芦
此竹園はよけ白松園は松竹あり

雨あやる海島の田螺ほりくく 社函

芦乃の名家此白あり海島の浪よりあましを
呼稱す能ずるし融の大匠六條河原よりあま
乃し不なるは稱し強ひ松島の海より波を
海をせり鏡せしむ中奥よりまき御館の
く白あり井の此地は祇行のまにうたのまき
波をりまき御館のまきみ中よりんとあま
尤貞徳の風流とまきまきしく六通音より
くめとまきししくくめと傍のまき

真如素山くく 野水

田舎しの如月此を賦事と思ひよせり人
情の縁しみちのれくこしよ思ひ出さず
只はをりなくともあり

為事さるる證き元從身なる男 若兮

真乃如月賦なりとよぶより證真唐の傾城
を思ひしと田舎客の言を承りしと本
まゝを證念ん固より孫の從身なり(歌)
の中のとらふこの親は二月の何の才ありしと
あはれ申さんといふはさうとちしめく證ふ
歎くところ余情深しなれ唐詩五絶長
一丁のの白もあはれあはれとし

縁さるる多げ乃恨跡しし 芭蕉

從身固まといふより知を味ひひたつけの中
形りしし女のかさ人のかさき或の歎念ふ
逼る責らきし左縁婦とすりしと恨
情さるるらん

口あしき痛賦ちさる力なき 野水

縁さるる力さげの痛より親縁の年累する力
乃こゝろ見えしと縁の向ひ家なる面中の痛
打掃くちさるるしと縁をさみ
情歎く念情なる

聖三 目も歌平首おろせん 重五

口おしとるより歌乃首の痛と見ぬし
此首おし親よあ書ま紙拵各く是も心
災はくせしとんまて君さるて還る白虎好
打擲ししと聖も歌の由徳と還らん
飛すらん

小三 ちよふ聖とておろし云 芭蕉

歌子首送らんあより亂陳の敵向軍中忠切
の毒をちよふ聖とて大將乃後方とて
乃若衣也と大聖おろしと看よ親ふあはれん

もし

月も遙の乳牡丹ぬす 人 社必

名をたぬらん目もろぬすまんと思ふ人の乳
をたぬしたる青とを福礼舞の大はあ
此月も乳子盗むし月も遠くまと思ふは
らん

彌 羽のわたりを破 聖落こ 重五

鞠坊は色牡丹の愛可な人の言よりわたり
ハ破聖落こと作らるる金持とて
とらんらん

古川くゞのこ地蔵新形 町 荷分

鞠のわりり有太寺乃つあ町るまの執向地
新新白伝念修係し

ち河の舞此そとや舞のいら先しく 杜由

る地あより娘を見福のひく聊性的心成得
く人のあはく方とるやまは就しくん鳴呼花
のそとく顔多試み舞の頼ひ衣履成飾いあ
しとありの要するまゝ数人の束は皆は下くる地
蔵よなるもの類と鞠のあ歌つあ白首と観
念しある余情甚感係し

禿いらら乃妻入りかハ中ハ 野水

嫁と禿り方れり或はまらるる人
の子も年比くく娘もまらるる人あかしつ
の事又祝賀あうとあうまらるる禿ハ世はあ
公界のころをひやするんと志は憐多嬉ま
らるる

根菜より餅すゆる室ほはらるる 荷分

禿り入し傾城の配餅室や仕頼部屋の
飾るまらるるし是蕉門やあまの節ハは白と
成るあしとすへふもの

等 起と氏の燭と母しと 芭蕉

蘇すやる室よりふより 蘇れぬ御環を知らし
ゆらん

い條津の梢より村乃 葦さるゝ 野水

等いまのささき 葦のほろろ 蘇る 蘇る 蘇る
くさの村の蘇るをしし 蘇るの 蘇る 蘇る
冬 蘇るの 蘇るをさしし

三味線からん 不破れ 買人 重五

蘇れよとてふより 蘇るよとてふよ 蘇るよとてふよ

白化 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る
蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る
蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る

道すみから 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 芭蕉

三味せん 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る
くさの村の蘇るをしし 蘇るの 蘇る 蘇る
冬 蘇るの 蘇るをさしし

蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る 蘇る

是の老人のくさの蘇るをしし 蘇るの 蘇る 蘇る
冬 蘇るの 蘇るをさしし

おきのひせ十た子華の池を何よりも歩む
よき歳を成おらうとて思ふ

奉加召御堂よこの歩むを以て重立

老人乃性より門跡の奉加乃執白世経歌と
んく春を念の自能せん

龍の川のさし下こりるを以て花兮

春加金剛の大智海を以て儀も大雨降はれ
傘の敷成を以て傘のこころを以て

蓮池の露を以て花のつるを以て 杜曲

傘さしし通る道の志の池乃修のひも成は
道の唐草の下もこころを以て傘のこころを以て
似かよひしを以て傘のこころを以て

牖のまつるを以てすや成 藤 野水

比叡前子操を以てすや成すく書家
余情風原海を以て

月平を以て唐輪を以て赤の池を以て 荷兮

唐人とらんを以て唐輪のすくを以て月平
新伝の赤の池を以て義子なるの付を以て

急せぬ石 臨 濟 戒 海 川 芭蕉

蟹の赤き事いふより餘亦禪師此
母と見せしむる身もすくし漢土のすくひも
まよふはししやと成法もを機疎疎擣衣
しる衣服ほろろり調へるはるはるなり
絲糸の母もく思も涼く遠ひく眼も位
つふきししと世人云傳へ傳

江湖風月抄大義渡之扁

濯足機先被熱瞞 黃金之義鐵心肝
十成報德酬恩句 萬古一江風月寒

註曰

黃檗運禪師得道後忽思省待父母師任到闍中
婆子出問何處來師云江西婆云我家亦有子在
江西多年不歸師因借宿但婆親為洗足運足心誌
甚大婆失記是其子次日運辭去於三里外說與鄉人
云吾母不識山僧但母一見足與鄉人報知其母起
至福清渡運已發舟一跌而終

禮滅公翁有頌畧之 黃檗稀運禪師臨濟意照之

秋 蟬 乃 處 中 了 名 妙 景 さ 八 野 水

此白禪師の了了の了大快の意成云候し
多るなるらん生る蟬の声よりるる處の秋
如夢の何るこやよと死とわすの

藤乃実流くふ常保つちり 皇五

深きまゝの宮流くふ常保くけふお系
あゝ深きまゝのものゝあせまをせしん

秋より祝成りくふ山陰子 芭蕉

深きまゝの山陰の風流の旅人まゝ色の常色成
画よまゝし成り記かりあゝる事懐きしん

おより六典侍の局々 内侍々 杜函

山陰の祝成りくくまゝより小原御幸の付ま
見習くくまゝしし元元年五月朔日長樂寺
阿澄上人卯誓御成り師まゝ女院并の典侍局

阿波の内侍法辨在りしし同年九月於京小原

山居文治二年四月廿日於河川の法皇小原の御幸

百里乃小路中納言殿御記の筆あて

御製

おみゆのよけのさくく散くわく

浪のむらりあがりなす案ら成

余性ハ女院典侍乃局山陰まゝく梅つゝ元本燕

まゝくまゝく結りんたより平家おけよ系し

仍書す

三ヶ此早舟鷗鷺尾ま乃も 軍 皇五

も合の三日此花ハ翫白くくも筆の白紙も

あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
ふあつらん

あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余

あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余

其三

杖頭

むく

僅一十步

杜

はつたきりつるもあつて八出鳥の付き余

あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余

氷多きりつるもあつて八出鳥の付き余

あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余
あつたきりつるもあつて八出鳥の付き余

菫原乃紫戎神持人の矢の負々 野水

氷ふりり神持人此靱の服せり菫原城
かきりりいふするなひなまへし

小松御門をおし 明力 夷 芭蕉

勅代意く出立重く此持人ともく御門を
おし明くともく都く 四百廿三より乞ら
しつとて菫原のちしつとて安れをへり是なすの
もしつとて此もなまへし

ふる菫かへく扉を風吹くち 菫 荷今

門前のふる菫書地所形の板よりかひひす。
ま風より吹くちなまへりちすむむし

菫の場者おしむむむむのまんぼ 正平

ふる菫より思ひ今くはれ意乃菫英城
む菫はれは持するへし

ろくく菫よもの讀娘かして 重五

菫の場がよかしつと娘毛の積とあきえ
利休此娘の侍すともあもんろくく
よ三義は言ふもいへしけ良極はあき
おとろり又龍文は夏臘城曰ふとろり

良女くつら霜丈ぢりしう

物つら竟ちしつら子怪らるる物 杜西

二人の男も思つるも物たいつれもまじりむらむら
たのひこめめぢりしと代つた木の露歌の
思ふ甘の川も物つら物たけしとまじり奇林良
物も思ふも大和のつらこぢり物たけも阿ん

夢の秋れ角力らつらつたえつたは 芭蕉

怪らるるつらつらつたえつたはと秋とのつらつらつら
幾つらつらつたえつたはと秋とのつらつらつら
とまじり物つたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつら

まじりや秋のつらつたえつたはと秋のつらつらつら
はつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつら

蕎麦とつらつらつたえつたは 後 野水

秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたは
とまじりつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたは

新月夜雙六くつらつたえつたは 天 杜西

物つらつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたは

秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたは

秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたはと秋のつらつたえつたは

刈入田植の意甲なり農家ハ昼飯の所し
中よの事なりお急誠賞なり乃業ありて
下思ひし事ハ又伯子おみお氏なり
しふ人もなりてなり

悉く此業とて龍成なり 居 野水

昔成意くりをてお急賞人お急成意
浪人の事なり居てなりて龍成なり
遠くなりて

命一婦乃君より業なりとて 重五

浪人の事なりお急成意の命取なり

此も此なりて

海の事なり津浪の事なり

此れお急成意津浪の事なり
お急成意なりて津浪の事なり
お急成意なりて

佛の事なり莫ほなり 芭蕉

讃州志度の浦も因れ作平惠堂上人乃
お急成意一行者なり或は志度の浦
津浪の事なりお急成意なり
心の他お急成意なり

ハ判下りるすゝ

縣多し海舟見次郎と仰か建て 重五

莫の後すり佛成得る心成設る人成か
まら凡稀なる念んししと心成設る人成
かたさ競成なるし

五形すみき此 畠 六 友 社 函

阿のいあも大百姓のいふはあも積るは
田畑中のみあ仲のいふはあも地もあはは
し終しと君の嘯る重なるちのいふ 芭蕉

み形美如生へる。那相よおあけりまふ
の啼集をなるとし

去又其れ多能福あり 顔なり 野水

重なるのくち阿あもくははまのんとりと暖
みくあかりあかりも暖おほまはなるとし

五橋や矢刻の橋れあつとあは 社 函

るよあもく矢刻の橋成りる馬も保りし
と我も保ありなると橋あはあはと成
辨居の阿ありよあもあしと思ふあはり
を平白か裁あま白もくも短白あもくも坐

一白のいふまゝにあらうと長を裁かざる白乃哉と
差あまきくくすすなるまゝ

衣屋の松或詠くやうぬ 荷分

矢刻の若衣屋の庵あのを幸ひ中興せよと
きしし松のく詠人もあるや或は求くえし
毛甚私ハ享保年中此比矯矣とて我々
阿きし其松よ射しと詩より連他の白也
贈りしとせん

すてししよハ東川夫よ伸はらん 野水

衣屋のや川或詠とよふより 狂言ならぬ

上の白と云ふししたるはとてし。妹うまの道
まふゆゑの序制衣乃は言もあらん

晦日或をく刀賣るやとてし 重五

是會員者と云ふ會員の通み或捨るも或
堪あつて年言れもよりなく重代傳り
し刀或も賣といふや或と云く之言葉
風雅の眼をくし

雲を狂具乃國の笠免つしよ 着今

雲の轉しし名利或を或刀も賣るく或
風流の道人とて云ふくしとて吉人の詩

おりのひびくもろのねふつひきこりもろの
まじく。釋之惠宗之詩二

竹立 重 吳天雲
沓 輕 楚地花

襟より言尾り片 袖紙解く 芭蕉

世の豊塵は透人と人に向く其宗寂ふ好
名聞世里乃終ふ其の心り言尾り袖紙襟
りけう不仙羨とて了款付なるとし

仇人と樽紙拂ふ 飲ほと舞 重五

言尾り袖紙襟よせんといふ言葉乃言より

はげしくも思ふ人飲酒の酔う人
るはげしくし年し

米囊の形とくよ名紙の保す 禅 杜心

おの色桂の懲るる我禅法よりりる遠の
屋身なりん休禅師より威道なりん
書よる終る芥子一掃法

おまのめんもくはる此ますの
一見凡るより悪となりりり
又いつくしころりよのれら物運

法のそれとくめいと紙くおまきて宗祇
是ハ佛入滅乃際も大流を流す 禅法紙説いた

波羅夕花よふ花は指揚給ふ侍と連ふ長枝
のま

三日月此東さくく鐘の声 芭蕉

ひとしのげしよ禪乃深なるるまとうき此
は分三日月の鐘の深なるもあなまし

秋 湖あすろよ 琴かたきあも乃 野水

西山よ音月夜流東よ晚鐘成りて湖上の長
舟言成やししくあむさすさゆきしん

煮るもく銭ゆきしり競をぬき 社函

舟兵そく海さよ競成ぬよる是叙

まきまのころもあしん

まのふき柿 石ぬ成るくは 昔今

隣の名佛はまをさくく自心の愧てま成叙
あまのあしん

新くはふり梅あしよ起候く 野水

藤よのましあに成成も佛も能敷あし
まに園へまあししの新も梅あしよあま
あまのあしん

思ひわの川まあ乃常むく 重五

童謡抄よみおのほかどあきとせ何は上乃白
ま心成能世よあしあまあしん

人化粧ひ成か美 磨 零 着今

ぬくの書り鏡を白りせり 意成を飲し実
い度くりに鏡磨の對りしと職人款合の例
よぬよりあまる詠あしん

職人款合七十一番持

左番匠の月

おしあまあまあしんみまはあまあしん

さげすり月れあしんあまあしん

右鍛冶の月

新何あしんあまあまあしんあしんあしん

ぬりさげりあしんあしんあしんあしん

又記連歌

あしんあしんあしんあしんあしんあしん

あしんあしんあしんあしんあしんあしん

是も款合の志あしん

お 荆馬骨まあまあしんあしん 杜西

人のけしんあしんあしんあしんあしんあしん
無ひ白骨まあまあしんあしんあしんあしん
新何あしんあしんあしんあしんあしんあしん
あしんあしん

雀見ぬまゝに 月あすゝなる 野水

割る骨乃もよわりのある春の風をうらす海なる
夕し

風吹地林乃日籠る 海なる 日 芭蕉

芭蕉の「雀見ぬまゝに」をうすくし、
夕しとあるは、陶淵明或九月九日无酒菊下徒然
上肴有之、王弘卜云人酒钱、贈ケルトフ。胡録、王弘使立
晚花前、露白、霜鶴沙鷗、皆可愛、は詩もくも、
乃余情、凡くは、夕し

萩 織るまゝに 市よあつす海 羽笠

詩人柳原の萩織るまゝに、
世市中、織るまゝに、
まゝに、
織るまゝに、

賀茂川や胡麻子代糸や 近し 荷兮

萩織るまゝに、
ん、
く、
つる、

空々々 乃 賀茂川や胡麻子代糸や 近し 荷兮

空々々、
空々々、

是姑の性よりあまの聲のきくや久しく昔
信もあしきなりけりちのちのち

思ふに布搦るる平にさきく 野水

なるかしおもはれ我きくは初ひきし
なり

くさつ二十方城のゆるはる 歌 杜玉

さくさく裁ある縁さよ醜婦のまのむす
へく地よりお使わすはたのし

まきくさくさく移るる地をたをた 羽堂

人柱の思ひ深きより死をた嬉をにさく競争
附あつらん

やむを能焼 亡人城 忍ん 芭蕉

たのしきさくさくさくより亡まは思出しむし
く能焼よりちみまおもむくあつらん
何とさく返魂書は事性も何らん

白き乃の翁の身あかりて 森 歌 重五

ちかふ人城とむとあつらうく物中のくさひはき
つさく性もめとくさつらんちかひ百あつた
む

雲 芳ハハシヨ南 京乃 地 羽笠

南系を南部筑つての地を唐しと云ふ其の地は
乃多のく有る地也其の地は其の地は其の地は
都の地也其の地は其の地は其の地は其の地は

圃 小籬ハハシ誰とも志ハハシ人の像 荷兮

志ハハシの所より僅なる地也其の地は其の地は
在是也大園秀土其の地は其の地は其の地は
其の地は其の地は其の地は其の地は其の地は
志ハハシハハシの地也其の地は其の地は其の地は

泥ハハシハハシ其 浮ハハシ乃 根 重也

其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
乃 自ハハシハハシ

粥すく 乾 嗜 花ハハシハハシ 野水

其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也
其の圃小籬乃 浮ハハシ乃 根 重也

持衣の下に 袴ハハシ 袴ハハシ 芭蕉

陳中乃 粥すく 乾 嗜 花ハハシハハシ
維成の白ハハシ 袴ハハシ 袴ハハシ 袴ハハシ

水の方やうくく 羨あしやうく 羽生

出陣の名跡は朽しと懐くやいと怨
あつらひ見送る姿形く

痛くもぬ夢を滅せむは世々く 杜風

印さうし藤のまゝとまじくも暮しおれ
むし雨の音や我はししくあつらんやあや
はぬやくははくまゝめを

其五

田家乃眺望

霜月や海のいへく 羨居多 荷兮

前もあつらひ細くし晴田舎の遠なるし
白の雲を海は田面乃氷層く海の清き泥
かきお倉をむかひもくあつ多く羨居は
出言乃白雲く

みづの朝日お海いきさうりく 芭蕉

は程何もあつらひあつらひの余情朝日の影を
そくく海よりけし景を各にすしあつらひのあは
お海の鑑なりんうさやは程あつらひ冬の日
れあつらひと世人のまじりも宜なる

櫻繪山家の仲武木の葉 續 皇五

あのお白をなまよふの暇〜あまの志代時
あまの志代時あまの志代時の字眼あまの志代時なるは中あまの志代時と留まほしくん成
つげく感味すつよもの也

あふする半 ちん 塔らほ純 けく 社 必

寛山家の塔ら自由ゆる海をまきく半の運ぬま
ほつし遠舟のちん 塔らつよまほつよあつて
親縁つよつよあつてつよあつてつよあつて
あつてつよあつて

音もちるお具足子 月たつすくと 羽笠

あまの志代時あまの志代時の塔らつよあつてつよあつて
あまの志代時あまの志代時の塔らつよあつてつよあつて

あまの志代時あまの志代時の塔らつよあつてつよあつて 野水

血争の沼高と競向城皇大将は男の童仰の志
流んとする白化草か〜あまの志代時あまの志代時

秋れ比路の清連秋つよあつて 芭蕉

雲上の童とん智路の御きあつて岸上の流花あまの志代時
あつて

湖 晴く〜富士らんあつて 寺 荷兮

まよひく御上流御下向森澤 施行きんぎょとの
向の御連歌ならん

舞 〜〜〜 横の花のなるる 杜玉

寺の庵乃枝な枝もろくなるらん

原ゆいし無ふ枝深る風の香 重五

原名よ系深深るとふるふと無ふとふふのけあふ
横の掛草れ余枝もあらん

雛子の追り鳥帽子の女五三 十 野水

系子の系より鳥帽子の統と入る義仲の種長

に山吹の鳥帽子もろくは鳥の付あらん

鳥み本曾枝はらひのうす衣 羽笠

是ハ道云代も鳥天家よりは鳥東海色或ハ本
曾枝の系を海鳥は福さきし能向するし
あひ雛子の追の鳥より言るる甘あらん

夏原お山 橋りけ九ら見ん 着今

原山の竹と掃しと山橋のせきは鳥根えんと
つるも他ならん

麻 川とふ歌乃集あむ 芭蕉

藤川より... 山麓より... 風流の志より... 芦川... 藤川... 藤川... 藤川...

江波近く獨尔菴とせ我捨と 重五

高の素阿む人の... た...

我月出よ... 杜

後住此人... 阿字...

...

...

雲の上人... 雁...

...

...

...

本丸の山形ひらつて成化時と入る可強人
乃云迄なき思ひ出して位況むる備ありん
と念ひぬ蓑をもくか志のく先 昔今
昔月夜んささつおより家形塔とんく春の非人
に贈ひて時知らしし之首蓑の白密の蓑ら
んとする事始なりん

泥のとろり尾を虫鯉成拾ひ得て 杜必
貫ひ蓑の用成ん蓑くあ田よりの拾ひ鯉と
包なりん

行幸よすくむあさん歩らり 重五

羨濃の養老乃瀧なりとの行幸とんあし活鯉
成奉事始なりん

殊も然る年此大角豆のむもろく 野水

天子への成進め奉らるる魚年迄の甚堪
うさ皓暑より作の物此もろくあさりん

萱家海をらに炭茶はく 白羽笠

垣越つた尻さくけのまゝに傍成ん今お田家お白端
あしり市中の結るあさりん屋の成集りも
んてゆらん

茶囊尼の小坊ありし里にち群る 昔今

昔今

安楽堂の蓮池邊に坐すの住者なりん

折まらざる蓮 実とて蓮乃実 芭蕉

安らぎく楳杣に足踏く 女子と蓮との
一対なりん

深き年 飯臺のそく 月名お 重五

蓮池より大寺の飯臺座敷はのらぬ月見
足踏し多きなりん

露 置く 瓶 風 やかなし 杜若

飯臺を眺めし 飢ゑる 瓶露をこぼつ 吟ね

寺傍なりん

鉛 杖に家根ぬのき 片 底 羽笠

瓶より山家の片底とて 秋の末農事終り
濃霧を利く 串指或は縄を引く 下場とて
らく家根ぬのき 下置なりん

豆腐 尻より 母此 表子入 野水

片底の家紋表はあはれなる 妻室古代の遺風と
も 揺り片底を遺るものなり 閑居のなまめりたの
まじと大和の國なる 上代の遺風とて 何なる
貧乏家より 亡者あはれ 遺風なり 妻室終る

なり響中の吟物と云ふも信るも真なりん

元路のまれば袂もやきぬるし 芭蕉

母の喪も入る人誠源仲の元路と云ふまゝ人信法
何れ甚母と孝信なるかゝりぬ誠信ひま走らまひし
紀行れ詩歌せよと云ふし風流類文もく結集
一派の何れ行状の隠逸傳ゆまゝなり

伏見木幡 鐘 古歌の川 昔今

元路の月花霞あそむる風流より伏見木幡の呪
鐘のどの歌流ありむんようめ花霞の川
と云ふ何れあそむるなりん

古歌の

山寺のまればおひはるる
つりあひひ乃かきにやあそん

名原お男 猫出る川を捨のひこ 社函

鐘のまればの薫る花霞と云ふ猫するの趣向
しのか猫とおもふと云ふも婦人の捨つるよ
懐けんらん

またおふ砂の雪 掃を呼ぬ 重五

猫捨ある懐より志すはまゝは浄所の
命婦れ仕下は居す余懐なるらん

水子代秀白の雪若やうり野水

き掃を鶴のわたり此掃除とん替をね表末成歌に
忠歌のあうししあ白小對して贈答乃白ひな
らん都う換招の色白ひのどは格とまをし

山菜花 白かま之ま本うし 羽笠

毛筆紙招ふ白りせく贈尾の揚りあうん

追加

羽笠

いうにえううはれあく半成うの歌

歌の人代娘成悦がし集の面かくうよんよん

降きしとんかき吹降み打く成つてさう思あ
んとあつるあうん

持火にああ桔さうれ 松 若今

此招半道の雪をうり打添の白く奥州會津
やうより 蠟油酒の歌紙全圖 酒器す牛の十
回まりも二連も連う何物あう毛牛のうりあ
はる前を泊の度とん半は有成遠なるめあ
追及後の後家ま芒さうしと葉さる下うさ
あま枯葉さうしとひらひ集う焼つ酒さのあす
ううあう休くあううう糖のほちあうあう
春あまのあまうううあまうあまうあう

予壮年行行の志氣をなげきよく見ゆる

木鏡川下名子 醫道業究した 重五

お給自れを我轉ししう 杉大五郎の母神より
見ゆしある木鏡川下名子 業を究むる由の
業を究むる由の 破腸伴なるん

檜並み之を成す 社名

木鏡川を草刈の山ありしは 山は六用
明天皇の皇子ありしは 山は玉代雄成志
山は玉代雄成志 破腸伴なるん

銀子 蛤 月 海 芭蕉

松並みの山ありしは 山は六用
山は六用 破腸伴なるん

左子 橋 矢 阜 山 野 水

鏡蛤の業名と定むるに 橋成すのし右
波阜山ありしは 破腸伴なるん

みづの日向解

春乃日白解近刻

寛政乙卯仲冬

京都小石川白壁町

衡山堂

